Bouquet ブーケ

contents

特集 男女共同参画と絵本・児童書 ……2p
インタビュー　公益財団法人東京子ども図書館常務理事 張替恵子さん
身近な図書館では ……　京橋図書館に聞きました ……4p
保育園では ……　晴海保育園に聞きました ……5p
絵本・児童書を読んでみました ……5p
輝くひとにインタビュー in 中央区 中央区消費者友の会 前会長 小川幸子さん …… 6p
Bouquet Information 講座・イベントの報告 …… 7p
TOPICS おとこの家事チャレンジ講座 …… 8p
女性センター「ブーケ21」へ来てみませんか？ ……8p

CHUO CITY

No.73
2014.3

表紙写真は、中央区立京橋図書館

中央区男女共同参画ニュース「Bouquet（ブーケ）」（年４回発行）は女性センターや区の施設等で配布しています

男女共同参画と絵本・児童書

子どもの心の成長に大きな役割をもつ絵本・児童書ですが、インタビューでは、公益財団法人東京子ども図書館の常務理事である張替惠子さんに、児童書の分野で活躍した女性たちや親子で楽しむ読書などについてお話を伺いました。また、区の取り組みとして、区立京橋図書館と区立晴海保育園にお話を伺うとともに、書評では、男女平等の視点で読み取れる絵本・児童書として東京ウィメンズプラザ図書資料室から紹介された図書を区民事業協力スタッフの方に読んでいただきました。

公益財団法人東京子ども図書館

中央区ともゆかりのある東京子ども図書館

東京子ども図書館は、昭和30年代初めに土屋滋子によって開かれた世田谷区と中央区の土屋児童文庫、石井桃子によって開かれた杉並区のかつら文庫、40年代初めに松岡享子によって開かれた松の実文庫の4つの家庭文庫が母体となっています。現在は、中野区にありますが、中央区とも深いゆかりがあります。東京子ども図書館は今年で40周年になります。

家庭文庫は、個人が自分の蔵書と住まいを近隣の子どもたちに開放して、本を貸したりお話を聞かせたりする小さな営みです。

当時、中央区入舟町にあった土屋児童文庫へのお誘いには「皆さんは学校がお休みの日、勉強やお手伝いのない時、近いところに本の一杯あるきれいなお家があって、すぐに行ってよむ事が出来たらいいなあーと思いませんか、こんど繋の湯の前にそんなお家が出来ました。土屋児童文庫といいます。どうぞみなさん大勢いらっしゃい。」とあったとされています。

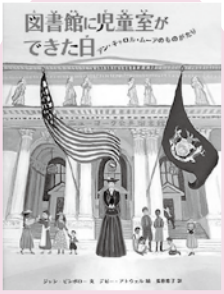
子どもと本の分野を切り開いた女性たち

家庭文庫は、戦後の復興期に子どもへの図書館サービスなどに力が注げなかった時代に、主に女性が心を砕いて開いていきました。土屋滋子は主婦、石井桃子は作家であり編集者、翻訳者であるという立場から、また現在も東京子ども図書館の理事長を務めている松岡享子は児童文学の勉強をして、児童図書館員という立場からアプローチしています。それぞれの関心の立場は違っていましたがみな女性でした。

アメリカにおいても児童図書館サービスでは女性が活躍しています。私は、『図書館に児童室ができた日――アン・キャロル・ムーアのものがたり』を翻訳していますが、アンは1900年代の初めに、ニューヨークの図書館で「児童室」をつくった児童図書館サービスの先駆者の一人です。アメリカで子どもにも図書館サービスの必要性が認められはじめた頃、その運営には、教養があり、公徳心のある女性たちが携わりました。

石井桃子は、児童文学の旅と呼ばれている北米の研修に行き、アン・キャロル・ムーアと出会い、図書館や出版社の人を紹介してもらうなどしています。児童書のパイオニア同士が接点をもったということです。

松岡享子もアメリカに留学して児童図書館サービスを学んでいますが、振興著しい図書館の児童サービス分野は、女性が才能を花開かせる場であったことは間違いありません。



『図書館に児童室ができた日――アン・キャロル・ムーアのものがたり』
ジャン・ビンボロー：文
デビー・アトウェル：絵
張替惠子：訳　徳間書店

3歳から図書館とする「利用のお約束」

東京子ども図書館では本の貸出を3歳からにしています。公的な

「中央区男女共同参画行動計画 2013」の基本目標
基本目標１　男女の人権が尊重される社会の形成
基本目標２　多様な生き方を認めあい、支えあう基盤づくりの促進
基本目標３　さまざまな場への参画の促進
基本目標４　男女共同参画社会の実現に向けた推進体制の充実

＊ 2013 年度、「Bouquet」では、計画の基本目標に沿って特集を組んでいます。子どもの頃からの男女共同参画の理解促進は、基本目標１の施策の一つです。

東京子ども図書館常務理事 事務局長 張替恵子さん

張替恵子さん（はりかえ・けいこ）
日野市立図書館で児童サービスを担当した後、1993年から東京子ども図書館に勤務。ブックリストの編集や書評などに携わる。図書館や学校でブックトークやストーリーテリングを数多く行うとともに、各地で研修講師として指導に当たる。武蔵野大学非常勤講師。訳書に『図書館に児童室ができた日』他がある。

図書館を利用するという自覚を子どもにもってもらいたいことから、3歳になるのを待って保護者は介在せずに子ども自身と「利用のお約束」をして貸出をします。「本を大切にする」「本を読むときは手をきれいに」など5つの約束ができたら、しるしとしてノートに自分でサインをします。字の書けない子どもは○や線を書いたりします。アン・キャロル・ムーアが1900年代の初めに「図書館の約束」をしたのとはいくつか違いますが、子どもたちを一人前に扱うことで子どもたち自身に本を読む規律と本を読む楽しさを理解してもらうことを意図しています。

家庭文庫の時代から大切に受け継がれてきた、よい本をしっかり選ぶこと、一人ひとりの子どもに話しかけ、一緒に本を選んだり勧めたりすることを大切にしています。

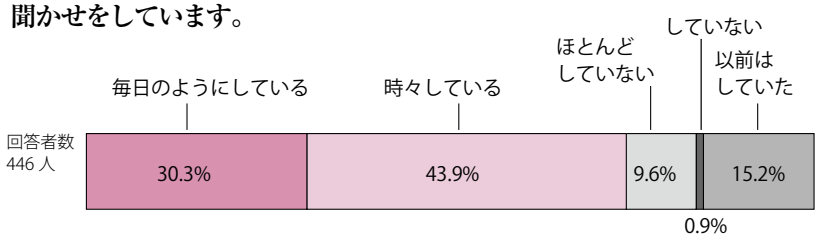
時間を共有し、共感できる本

今はいろいろなゲームやアニメーションなどメディアがありますが、本ほど豊かなものをもっているものはないと思います。本は言葉を習得する意味で一番すぐれたメディアです。子どもたちはゲームなど機械的なものにひかれますが、字が読めない子どもでも、声に出して読んでもらえば、想像力を駆使してイメージを広げ、楽しさを享受できます。それを導いていくのは大人であり、大人の手引きが大きな役割をもちます。そういう意味では人間関係やふれあいを醸成してくれるメディアであるともいえます。

親が子どもにしてあげることは限られています。石井桃子は「大人になったときにあなたを支えてくれるのは、子ども時代のあなたです。」という言葉を残しています。

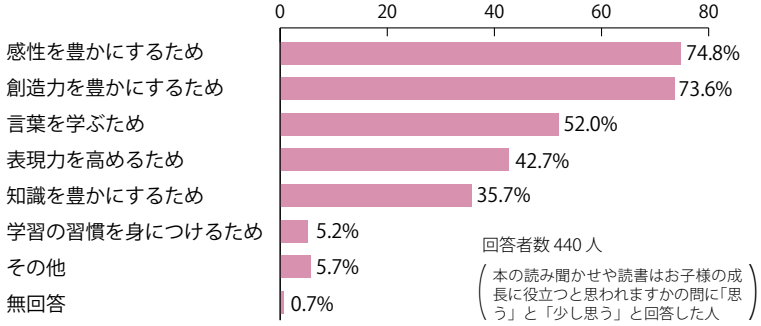
図表1　家庭での読み聞かせ
（区立幼稚園3～5歳の保護者、区立小学校1～3年生の保護者対象）

「ご家庭で本の読みきかせなどをされてますか」の問に、「毎日のようにしている」と「時々している」を合わせると、7割以上の家庭が読み聞かせをしています。



図表2　読み聞かせや読書が子どもの成長に役立つこと（複数回答）
（区立幼稚園3～5歳の保護者、区立小学校1～3年生の保護者対象）

本の読み聞かせや読書が子どもの成長に役立つと思うと答えた人にどんな場面で役立つかをたずねたところ、「感性を豊かにするため」、「創造力を豊かにするため」、「言葉を学ぶため」などが上位にあがっています。



「第二次中央区子ども読書活動推進計画」（中央区教育委員会、平成25年3月）より作図

す。子ども時代によい本とめぐりあうこと、それを大事に思ってくれる大人が子どものそばにいてくれることも子ども時代の大切なことの一つです。

子どもと本を楽しむことは、子どもにとってよいだけでなく、子育てをする側の大人にとってもよいものだと思います。子育ての限られた時間の中でこれだけは子どもと一緒にした、子どもといい時を過ごせたという充足感がもてます。何かをしてあげたという自信が親を支えてくれるかもしれません。

大人と子どもが時間を共有し、共感することができるというのが、本の強みです。本を一緒に読んだときの空間までも含め豊かなつながりができます。

豊かな日本語を親の声を通して聞かせる

父親が子どもと過ごす時間も大事です。本はその時間を作ってくれます。週休二日制になった頃から週末に子どもと図書館に来るお父さんが増えました。読み聞かせをするお母さんの声もいいけれど、お父さんの声はいいですね。いろいろな豊かな日本語を親の声を通して聞かせてあげられるということが、子どもに本を読んであげることのよさだと思います。そこにお父さんの声が加わることにより、おもしろくなるお話がたくさんあります。『三びきのやぎのがらがらどん』はお父さんの声のほうが迫力がありますね。『一寸法師』のオニなど、読み聞かせは、お父さんが子育てに参加できるチャンスになっていると思います。

読み聞かせは字が読めるようになったら終わりでなく、いつまでも続けられます。自分で読むと、人に読んでもらって耳から聞くほど理解できません。耳から聞くと10倍時間をかけて想像力を広げられます。文化を楽しむ深みが出てきます。文字が読めたところでおしまいにせず、ぜひ続けてください。親子の貴重な時間になると思います。

インタビューに同席して

以前から一度訪ねてみたい図書館でした。張替さんには、子どもたちを見守る優しさの中に、はっきりとした意志を感じさせられる言葉でお話をしていただきました。子どもたちが日頃図書館や図書室でまず行う「図書館でのやくそく」のルーツを改めて知りました。こんな図書館が近くにあるのは、羨ましい限りです。

区民事業協力スタッフ　**橋谷信代**

身近な図書館では……

京橋図書館児童担当 角さん、木村さんに聞きました

100年の歴史をもつ児童室

中央区には、京橋図書館、日本橋図書館、月島図書館の3つの区立図書館があり、いずれも100年の歴史をもちます。中でも京橋図書館は、開設当初から児童閲覧室が設置されていました。戦火を免れたこともあり、昭和2年発行の児童全集をはじめたくさんの絵本の初版本を所蔵しています。

児童室利用者は増えている

ここ何年かの児童室の利用状況では、平日の夕方は小学生や母親との親子連れ、土・日曜日は父親との親子連れが多くなっています。マンションが増え、子どもの数も多くなったことから利用者も増えています。児童室で子どもに読み聞かせをする父親の姿もみられます。

ゲームやアニメなど読書に変わる楽しみが増えていますが、図書館の利用を見る限りは、本に興味をもつ子どもは減っていないようです。

性別よりも好みや個性に応じた本を紹介

区立図書館では、赤ちゃんのころから絵本に親しんでもらえるように、保健所で行う乳幼児健診のときに「はじめてであう赤ちゃんえほん」を配布し、図書館職員による読み聞かせも行っています。絵本には言葉と心を育てる大きな力があると考えています。

また、図書館には、保護者などから「○歳の女（男）の子向けの本を紹介してほしい」といった問い合わせが多く入ります。職員は女の子、男の子といった性別で本を紹介することなく、興味のあることなどをお聞きして、一人ひとりの好みや個性に応じた本を紹介するようにしています。

子どもの頃から絵本や児童書に親しみをもち、一生を通じて読書を楽しんでほしいと思います。

区民事業協力スタッフレポート

絵本・児童書を読んでみました

ここに紹介している本は、女性センター「ブーケ21」1階にあり、閲覧や借りることができます。

『サンタのおばさん』

サンタクロースが主役の大人向けの絵本です。クリスマス前に毎年世界各国にいるサンタが会議を行うために集まり、子どもたちへのプレゼントを何にするか話し合うところから物語は始まります。物語の中で、女性がサンタになれるかという問題をとおして、サンタは白人でヒゲを生やした男性というイメージは無意識の固定概念だったという事に気づかされました。各国の文化や考え方の違いにも触れられており奥が深い絵本となっています。

区民事業協力スタッフ　中原玲子

『サンタのおばさん』
東野 圭吾／著
杉田比呂美／イラスト
文芸春秋

『おんぶはこりごり』

ママは毎日、パパや子どもたちの世話で大忙し。うんざりして、とうとう家を出てしまいます。残された家族は…。ユーモラスな絵に笑いながら、家族のあり方を問い直す絵本。働くママが家事も育児もと負担がかかればストレスや不満もたまります。世のママたちにとって納得の痛快ストーリーです。パパたちが読んでも感謝の心が伝わりやはり納得の幸福ストーリーです。おんぶから解放されたママを見ると思わずハッピーになりました。

区民事業協力スタッフ　村田進益

『おんぶはこりごり』
ブラウン・アンソニー／作
藤本 朝巳／訳
平凡社

『パパはステキな男のおばさん』

小学2年生のまりちゃんは、我が家の家庭事情で悶々とした日々を送っています。確かにこの本が書かれた26年前には、まだまだお母さんは家にいてお父さんは外で働くという形態が大半を占めていました。しかし、お父さんが家にいるまりちゃんの家では…。お父さんや学校の友だちとの交流を通じて、まりちゃんの考えや思いに変化が表われ、だんだんとこの状況を受け入れていく様子が描かれています。大人が読んでも共感できます。

区民事業協力スタッフ　橋谷信代

『パパはステキな男のおばさん』
石井睦美／文
あおきひろえ／絵
BL出版

『パパのはらっぱママのしま』

1ページ目からいきなり「パパのはらっぱは、すごいぞー」「ママのしまはすごいぞー」と不思議なセリフ。「えっ、パパははらっぱ、ママはしまを持ってるの？」どんなお話になるのかとどんどん読み進んでいくと、ママのしまは、たたんでひきだしに入っているらしい。最初から最後まで「??」と奇想天外なお話でしたが、読み終わると「こんなパパとママっていいな」と何だか暖かい気持ちにさせられます。和田誠さんのやさしそうなパパとママの絵もとても素敵です。

区民事業協力スタッフ　脇坂文栄

『パパのはらっぱママのしま』
落合恵子／文
和田誠／絵
クレヨンハウス

保育園では……

晴海保育園 鈴木園長に聞きました

絵本を読んだときのふれあいやぬくもりも記憶に

中央区立保育園の園長や保育士を対象にした実務研修で、学習院大学講師の山口雅子さんを講師にお迎えして「絵本について」というお話を伺いました。大学生に子どもの頃の絵本の思い出などを調査した結果、大人になっても親に読んでもらったときのゆったりした気持ちやそのときの情景、絵本に引き込まれていったことなどを覚えているということでした。

絵本の内容だけでなく、その時の大人との触れ合いやぬくもりまでが心に残るというお話を聞き、絵本を通して子どもと一緒に過ごす時間の大切さを改めて感じました。

絵本コーナーは親子で過ごせるくつろぎのスペース

晴海保育園では絵本コーナーを設けています。登園やお迎えのときに、親子で過ごせるスペースとして、絵本を読みながらくつろいでいただいています。最近は、送迎にくる父親も増えてきました。絵本コーナーを利用していただくお父さんもいます。絵本は年に3、4回、季節にあったものなどを入れ替えています。

絵本は子どもの年齢に合ったものを重視

絵本は想像力をかきたてるという点で、子どもの成長に大きな力があると思います。男女平等の視点として絵本を意識したことはありませんが、逆に園では生活全般にわたって、男の子だから、女の子だからといってわけへだてることもありません。絵本も子どもの年齢に合ったものを重視しています。

晴海保育園は絵本の貸出もしています。親子で絵本を読んで、一緒に過ごす時間を楽しんでほしいと思います。